

カキ円星落葉病

山口 吉 博

Yoshihiro YAMAGUCHI：

Studies of circular leaf spot (*Mycosphaerella nawae* Hiura et Ikata)
on Japanese persimmon in Hokuriku District

北陸4県におけるカキ栽培面積は1,740haと全国25,700haの6.8%を占める（農林水産統計年報平成13～14年）。カキ円星落葉病は樋浦ら（1929）により発見命名された病害で、全国のカキ栽培地でごく普遍的に発生しており、北陸地域においてもカキの主要病害の一つである。病原菌は *Mycosphaerella nawae* Hiura et Ikata で、罹病落葉上で形成される子嚢胞子による一次伝染のみで発病し二次伝染は行わない。主要感染時期は5月中・下旬～6月末頃で多雨条件で感染が助長される。感染後60～120日間の潜伏期間を経て発病し、9月上旬頃から葉に周縁が黒紫色、内部が赤褐色の円形～不整形病斑を形成し落葉する。本病の発生には第一次伝染源量、気象、樹勢等が関与する。

北陸地域におけるカキ円星落葉病に関する研究については、森山ら（1991）の子嚢胞子飛散時期に関する報告がある。新潟県新津市及び北蒲原郡聖籠町で1972～1989年の16か年にわたり子嚢胞子飛散状況を調査し、

2月1日を起算とする平均気温0℃以上の積算温度から相関式を導き初飛散期（600日度）及び飛散最盛期（1300日度以降のまとまった降雨後）について予測できるとした。1990年に予測式との検証を行ったところ実測値にはほぼ一致し、防除時期の決定に利用できることが実証された。その他、農薬登録を進めるために各県で新規防除薬剤の効果試験及び作物残留試料調製等が精力的に取り組まれた。

参考・引用文献

- 樋浦 誠・鋳方末彦（1929）柿の円星性落葉病々原菌。病虫雑 16：14～16。
山口 昭・大竹昭郎編（1986）カキ円星落葉病。果樹の病虫害—診断と防除—：476～478。
森山 勉・横山泰裕（1991）カキ円星落葉病の子嚢胞子飛散予測。北陸病虫研報 39：113。
各県試験研究成績概要集